

漁況海況予報事業*

概要

中地 良樹・吉本 洋・小久保 友義・内海 遼一
安江 尚孝・土居内 龍・東田 和行 他6名

目的

本県沿岸および沖合の海況と漁況をモニタリング調査することにより、海況と漁況に関する調査研究の基礎資料を収集し、これらの情報を漁業関係者に提供して漁業経営の合理化に資することを目的とする。

結果

調査結果は漁海況速報、沖合黒潮調査速報などで速報した。特徴的な漁況と海況の概要は次のとおりである。

方法

平成17年度漁況海況予報関係事業計画にしたがって実施した。

1) 海況

黒潮(図1、表1)

潮岬沖合の黒潮は、2005年1～8月前半まで離岸を継続した。特に、1～4月の離岸規模は距岸60マイル以上で大きかった。人工衛星画像によると、紀伊水道沖から潮岬沖の黒潮北縁の変動は大きく、2月上旬に一

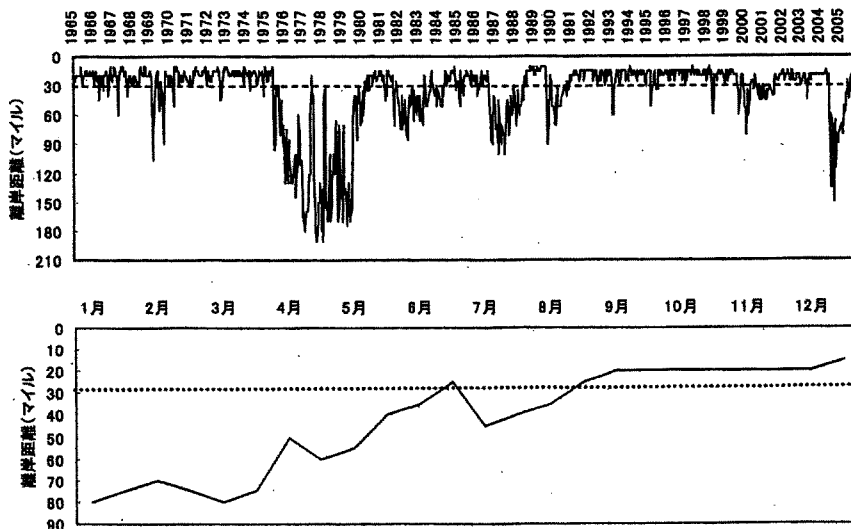


図1 潮岬南沖の黒潮軸位置(海上保安庁海洋情報部 海洋速報)
上段は1965～2005年の長期変動、下段は2005年の月前半・後半の変動

表1 潮岬南沖と紀伊水道合ノ瀬南沖の黒潮本流位置(距離:マイル)

月	2005.1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
潮岬 前半	80	70	80	50	55	35	45	*25~35	20	20	20	20
黒潮流型	A	A	A	A	C	C	C	C	C	N	N	N
後半	75	75	75	*50~60	*35~40	*25	40	25	20	*10~20	20	15
黒潮流型	A	A	A	A	C	C	C	C	CN	N	N	N

*印は和歌山水試「きのくに」沿岸・沖合観測、他は海上保安庁海洋情報部

* 漁業資源・漁場調査と情報提供事業費による。

時的に 33° N 付近まで北上がみられた。この頃、黒潮北縁部から四国東岸（芸東）に顕著な暖水波及がみられ、そこから暖水は時計回りに本県沿岸に達した。紀伊水道入口付近の水温塩分フロントの形成は、冬季に緩やかであったが、水道内部に達する強い暖水波及は少なかった。内海系水の南下は、1～2月に和歌山県寄りから度々みられた。3月中旬、紀伊水道外域沖合へ黒潮北縁部から反時計回りの顕著な暖水波及がみられ、水道入口付近に顕著な水温フロントが形成されて水道内と外域の水温差が大きくなった。その後、潮岬沖の黒潮は4月まで大きく離岸を持続したが、5月に離岸規模はやや小さくなり、6月に離接岸変動がみられ同月24日の沖合観測時に25マイルに接岸していた。しかし7月初めに小蛇行が潮岬を通過し、30～40マイル程度にやや離岸した。黒潮が接岸に転じたのは8月後半で、その後は12月末まで概ね接岸を持続した。

熊野灘では、2005年1月に黒潮内側反流に伴う北部からの暖水の南下が頻繁に発生し、下旬に熊野灘沿岸から潮岬沖まで達する顕著な暖水波及がみられた。しかし2月以降は内側反流の顕著な発達はなくなったが、内側反流起源の小暖水渦の南下がみられた。その後熊野灘北部からの暖水波及が少なくなり、6月以降は潮岬南東沖の黒潮北縁からの暖水波及がみられた。黒潮が潮岬で接岸となった8月下旬以降は、樫野埼から東に延びる潮目が形成され、沿岸部への暖水波及は単発的となった。

沿岸水温（図2）

定線観測による各海域の水温は次のとおりである。

紀伊水道内（日ノ御埼以北）

各層の水温は、1～3月が平年並み～やや高め、4～5月が概ねやや低め、6月がやや低め～やや高め、7～8月は底層冷水の進入で低め～かなり低め、9月以降は10月の0～30mのやや低めを除いて、概ねやや高め～高めで経過した。

紀伊水道外域（切目埼）

各層の水温は、1～4月が概ね平年並み～やや低め、5月がやや低め～かなり低め、6月が平年

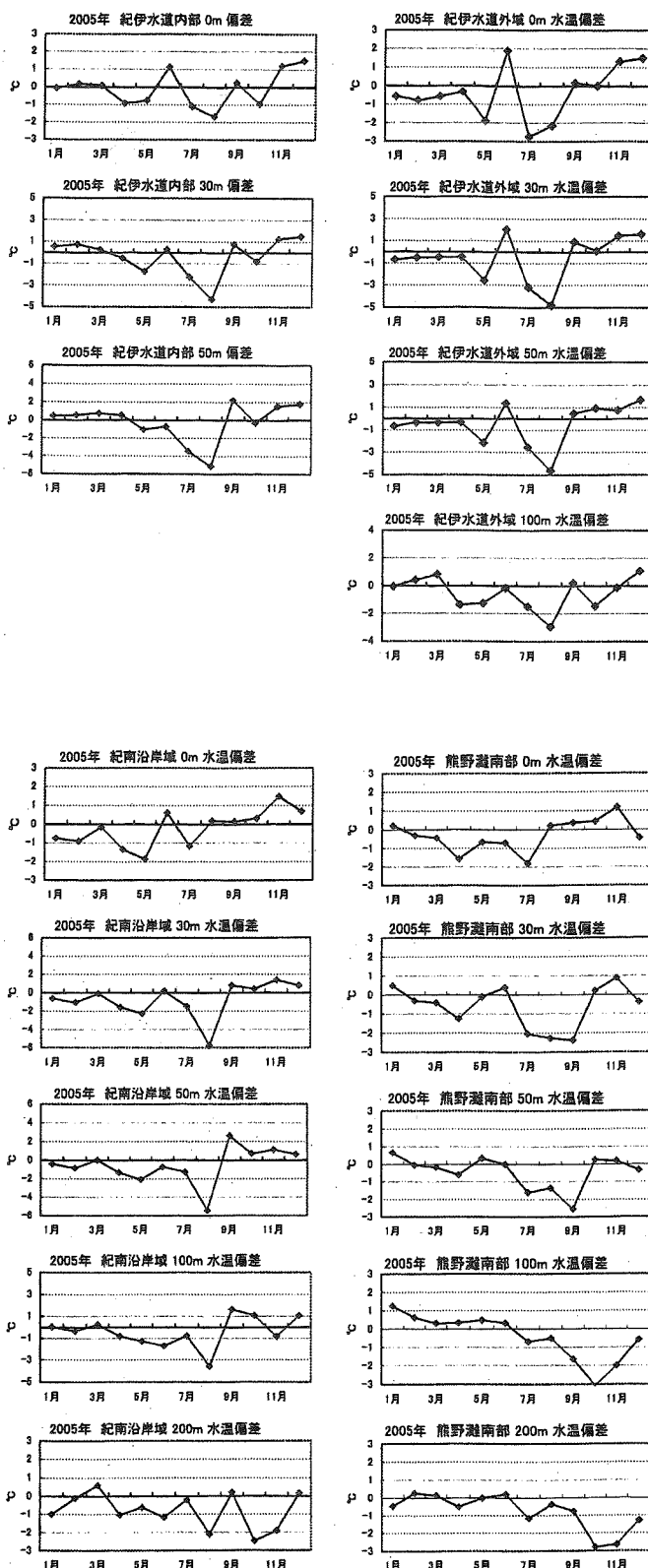


図2 2005年1～12月の水温偏差の経過

並み～高め、7～8月が低め～かなり低め、9月以降は12月の30～50mの高めを除いて概ね平年並み～やや高めで経過した。特に夏季の7～8月に底層冷水の進入による低温化が顕著であった。

紀南沿岸（瀬戸崎～潮岬）

各層の水温は、1～8月は3月の平年並み～やや高めを除いて、概ねマイナス傾向が目立った。9月は水温変動が大きく平年並み～かなり高め、やや低め、10月以降は概ね平年並み～やや高めで経過したが、10～11月の200mが低めとなり底層で低温化した。

熊野灘南部（櫻野崎～駒崎）

各層の水温は、1～2月が平年並み～やや高め、3月が平年並み、5～8月は7月のやや低め～低めを除いて、平年並み～やや低め、9月は水温変化が大きく0mの平年並みを除いてやや低め～かなり低め、10月以降は0～50mが平年並み～やや高、100～200mがやや低めかなり低めとなり、10～11月の底層で低温化が顕著であった。

定地水温（図3）

串本東岸と西岸における定地水温観測結果を図3に示す。串本東岸では、1～2月は内側反流に伴う暖水

波及の影響で平年値を上回ったが、3～5月は暖水の影響が弱くなり全般的に平年値を下回った。しかし夏季6～8月の水温変動は極めて大きく平年値を大きく上回ったり、逆に大きく下回ったりした。黒潮が安定して持続した8月下旬以降の水温変動は小さくなり、秋季10月後半～11月前半は平年値を上回り気象の影響も受けたとみられる。しかし、12月は各地でみられた気温の低温化の影響で平年値を大きく下回った。

串本西岸では、黒潮が大蛇行期であった1～6月に平年値を下回ることが多く、夏季6～7月の水温変動が東岸同様に大きく、黒潮が一時的に潮岬に接岸した6月中旬に平年値を大きく上回った。9月以降は紀伊水道側では暖水波及が頻繁にみられ平年値を大きく上回ったが、12月は気温の低温化の影響で東岸同様に平年値を大きく下回った。

**2) 漁況
マイワシ**

紀伊水道外域から熊野灘における1そうまき網では、1-7月まで不漁で推移し、前年および平年を大きく下回った(1-7月：前年比13.0%、平年比24.5%)。8月に入ると熊野灘で漁場が継続して形成され、12月まで極めて好漁で推移した(8-12月：前年比2,672.4%、平年比

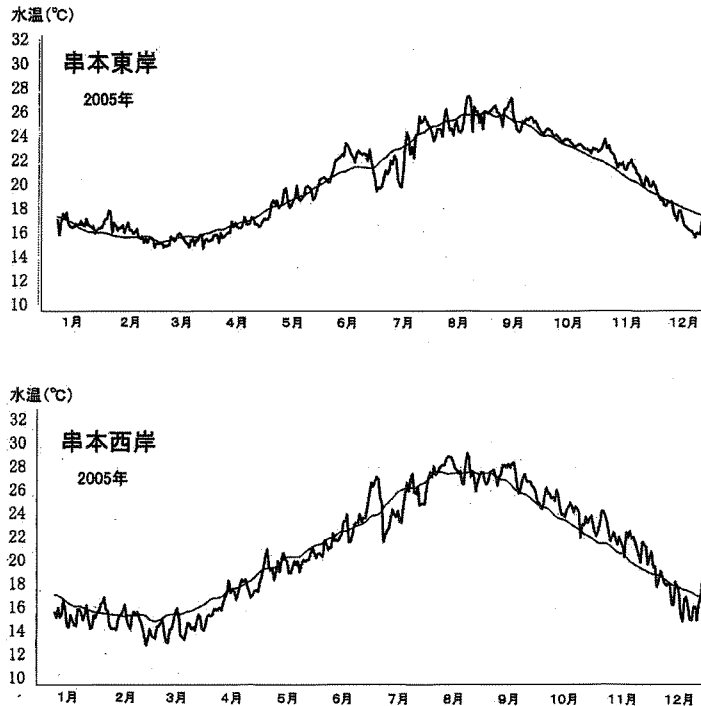


図3 串本東岸・西岸の定地水温
太線は実測値、細線は1971～2000年の30年間の平均値

365.1%)。また、紀伊水道外域で当歳魚を漁獲する棒受網では、漁期を通じて好漁であった(4-10月：前年比287.6%、平年比132.7%)。

ウルメイワシ

紀伊水道外域から熊野灘における1そうまき網では、1-7月まで不漁で推移し、前年および平年を大きく下回った(1-7月：前年比33.5%、平年比59.7%)。8月に入るとマイワシ同様熊野灘で継続して漁場が形成され、12月まで好漁で推移した(8-12月：前年比3,617.0%、平年比453.9%)。また、紀伊水道外域で当歳魚を漁獲する棒受網では、漁期を通じて漁が継続した(4-10月：前年比117.4%、平年比118.9%)。

シラス

紀伊水道内域における2005年春漁の開始は4月14日と遅く、好漁であった前年および平年を大きく下回った(4月：前年比5.1%、平年比14.2%)。しかし、漁は比較的継続し、5月是不漁であった前年を大きく上回り、平年並みの漁獲があった(5月：前年比495.6%、平年比102.9%)。6月に漁獲が途切れて以降は総じて不漁であった。一方、紀伊水道外域は、4月にまとまった漁獲があった(4月：前年比677.3%、平年比271.3%)他は総じて不漁であった。

サバ類

紀伊水道外域2そうまき網では、4月、7月および10月にまとまった漁獲があった以外は低調に推移し、特に11月には魚群がなく操業できなかった。年間漁獲量は3,156トンで、平年の62%であった。漁獲の主体はゴマサバであり、田辺漁協水揚統計表によると2005年のサバ類漁獲量の79%を占めた。魚体はマサバが1・2歳魚主体(2003・2004年級群)で、4月に散発的に尾叉長40cm前後の大型群が漁獲され、下半期に0歳魚(2005年級群)が混じた。ゴマサバは1歳魚(2004年級群)主体であった。南部町1そうまき網では、ゴマサバ主体にまとまった漁獲があった。

熊野灘南部定置網、串本1そうまき網では、4月と7月にゴマサバ主体に漁獲がまとまった。熊野灘南部定置網の年間漁獲量は197トンで、ほぼ平年並みであった。

串本棒受網と熊野灘定置網による0歳魚の漁獲は平年を上回りまずまずであった。

マアジ

紀伊水道外域2そうまき網では、7月にまとまった漁獲が見られた以外は低調に推移し、特に11月には魚群がなく操業できなかった。年間漁獲量は1,678トンで、平年の57%であった。黒潮が潮岬沖を離岸傾向で推移したことによって紀伊水道外域への暖水波及が少なく、来遊条件と漁場形成条件が悪かったことが原因であろう。3月と4月に漁獲されたマアジは体長範囲17-39cm、体長モード26cmで、3歳魚(2002年級群)主体であった。また、7月に漁獲されたマアジは2歳魚(2003年級群)主体、10月は1歳魚主体と思われる。南部町漁協1そうまき網でも同様に低調な漁獲で推移した。

熊野灘定置網では4～6月にまとまった漁獲があったものの、年間では平年を下回った。4～6月の漁獲主体は1歳魚(2004年級群)と思われる。

0歳魚の串本漁協棒受網と熊野灘定置網による漁獲は平年を下回った。

カツオ

(1) ひき縄

主要3港(串本、すさみ、田辺市場)の2005年1～2月のカツオの水揚量は19.0トンと、1981年以降では16位と低調な漁で始まった。盛漁期となる3～5月の水揚量は446.2トンと、1981年以降では22位と極めて不漁となった。しかしながら、8～12月の水揚量は31.7トンと、1992年以降では3位と好漁となった。特に、12月が14.2トンで好漁となり、冬季までひき縄漁で漁獲されたことが特徴である。

2005年のカツオのひき縄漁は、1月下旬にピンナガ(20kg前後が主体)に混獲される形で始まり、漁場は黒潮の北縁(31°50'32"08'N、135°13'23'E)となった。その後、2月中旬以降はカツオが主体となった。2～3月の漁場は、33°00'N以南の黒潮のシオ中～北縁が中心となった。しかし、3月の漁場は、潮岬南沖の小冷水渦の通過に伴い、紀伊水道へ短期的な暖水波及がみられ、33°00'N以北の潮岬西側の沿岸域でも漁場がみられた。特に、2～3月は漁場が遠方となることが多く、海上で1～2泊する漁船が多くみられ、出漁漁船も非常に少なかった。特に、2月はその傾向が顕著で平年(10ヶ年平均)に比べ16%程度の出漁となった。

4～5月の漁場は黒潮の北縁(33°00'N、135°40'E)～沿岸域が主となった。特に、沿岸域に漁場が出来る場合は、小冷水渦の通過に伴う暖水波及が非常に重要であることが窺える。また、7月以降は潮岬沿

岸～熊野灘南部沿岸域が主となり、8月下旬～11月上旬にかけて、一部は潮岬沿岸で瀬付きとなり、オキアミによるフカセ釣で漁獲された。

2005年のひき縄による春季カツオ漁は、極めて不漁に終わった。この要因としては、

- ① 黒潮大蛇行に伴い、漁場が遠方であることが多く、出漁船が減少した。特に、漁期初めは、その傾向が顕著に現れ、限られた漁船しか出漁できなかった。また、燃料費の高騰で出漁船の減少に拍車がかかった形となった。
- ② 4月以降、伊豆諸島海域付近からの熊野灘への黒潮内側反流の西への張り出し勢力が弱く、熊野灘沿岸域まで暖水波及があまりみられなかったため、熊野灘沿岸域に好漁場ができなかった。
- ③ 紀州沖に来遊するカツオが少なかったものと考えられる。
- ④ 黒潮大蛇行によりカツオの回遊経路が変わってしまった可能性も示唆される。

等が考えられる。

その他、特記事項として、2005年は漁期初めからカツオと共にヨコワ（尾叉長50～60cmが主体）が例年になく多く、3月がピークとなり4月下旬まで漁獲された。

(2) 沿岸小型竿釣

主要3港（串本、すさみ、湊浦市場）の2005年のカツオの水揚げは、2月に串本市場で1.3トン、3月にすさみ市場で0.1トンと少ないながらも水揚げされた。4月には40.1トン水揚げされ、1989年以降では3位と順調な漁模様となったが、5月には96.6トンでやや不漁となった。しかしながら、6月以降は比較的好漁となり、特に10月には26.8トンと、1989年以降では2位と好漁となったことが特徴である。

3) 沖合・沿岸・浅海定線調査報告、漁況・海況情報の発行

(1) 沖合・沿岸・浅海定線調査報告

主な配布先 水産庁、水産研究所（中央・瀬戸内他）、都道府県水産試験場、気象庁、漁業情報サービスセンター、海上保安庁

発行部数	沖合定線報告	41部
	浅海・沿岸定線報告	46部

(2) 漁況・海況情報

a) 人工衛星海況速報 平成9年3月に導入した「人工衛星受信解析システム」を使用し、リアルタイムの衛

星画像情報を適宜提供した。情報提供は解説を記載し関係漁協などへ44件ファックス送信した。

b) 海況速報 漁業情報サービスセンターからファックス受信した海況速報は、県下関係漁協にファックス送信した。

c) 南西東海沿岸海況速報 上記b)と同じくファックス送信した。

d) 南西東海海域沿岸漁況情報 適宜魚種別広域漁況を関係漁協にファックス送信した。

e) 沖合黒潮調査速報 調査船「きのくに」による本県沖合の黒潮とその内側域の漁場海況調査を関係漁協、関係機関にファックス送信した。送信先は63件、回数は6回である。

f) 漁海況速報（第17-1号～第17-52号）和歌山県沿岸、沖合を中心とする1週間の海況と漁況情報をファックス送信により提供した。送信先は87件、回数は52回である。

主な提供先 水産研究所（中央）、府県水産試験場、県内全漁協、関係協力漁業者、その他関係者

g) その他

・毎週1回海況・漁況を広報（週間南紀ウィークリー、紀伊民報等）した。